

# 中條幸一 デンタルオフィス

ライフワークとしての学校歯科医。  
沿岸の学校の被災・避難マップを作成。



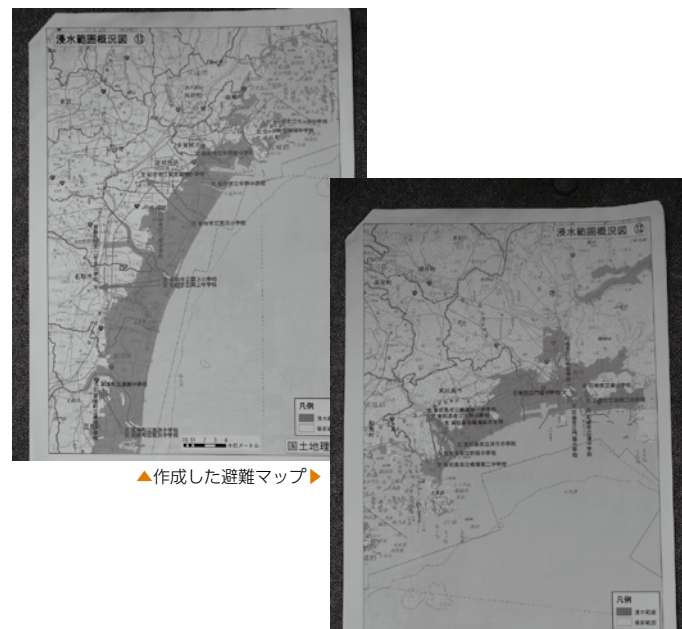
▲院長の中條幸一さん

震災直後に病室で過ごした5日間を活用。  
被災地の学校へ連絡して状況把握。

震災当日は診療中だった5名の患者さんの安全を確認し、無事に帰宅していただきました。ライフラインが途絶え、翌日から2週間ほど休業することになりましたが、その間、私が3月16日に体調を崩し5日間入院することになったのです。病室の窓からは、ヘリコプターが次々に大学病院を行き来するのが見え、被害の大きさを物語っていました。

体調が回復するにつれ、宮城県歯科医師会♥学校歯科役員を約40年担当してきたせいか、県内、特に沿岸部の児童生徒のことが頭を離れませんでした。宮城県歯科医師会や教育委員会とは何とか連絡を取ることができましたが、それぞれの学校の状況までは把握できませんでした。私は今の自分にこそできることがあると思ひ直し、これまで培ってきた各学校との個人的なネットワークや交流関係をフルに活用して、学校の状況や避難先について次々に電話で聞き取りを始めました。中には臨時の衛星電話でしかつながらない学校もありました。こうして病室での5日間の時間を使い、ほとんどの学校と連絡をとることができて被災状況が分かりました。これをもとに退院後、歯科医師会事務局の協力を得て津波による浸水範囲と浸水域にある

学校の児童生徒がどこに避難したかが一目で分かるマップを作成することができたのです。



▲作成した避難マップ

日常を回復するための学校歯科検診。  
各自の持ち場で誠実に取り組む素晴らしさ。

各学校では毎年4月から6月末までに、学校歯科検診を行います。震災後の困難な時期だからこそ、検診が普段の生活を取り戻すきっかけにもなるのではないかと。県内の学校歯科医が各々の持ち場の中で誠実に日常を取り戻す努力をしようと、歯科医師会では検診の準備をすすめることになりました。

気仙沼や南三陸、女川をはじめとする被災したすべての学校へ、歯科医師会に集まった約1万本の歯ブラシ、検診器具、コップなどを送りました。さらに全国から届いた義援金を使って口腔衛生教材、資料、パネルなどを提供しました。こうして、震災に遭った年にもかかわらず、宮城県内の約90%の小・中学校、高校で6月までに歯科検診が実施されました。

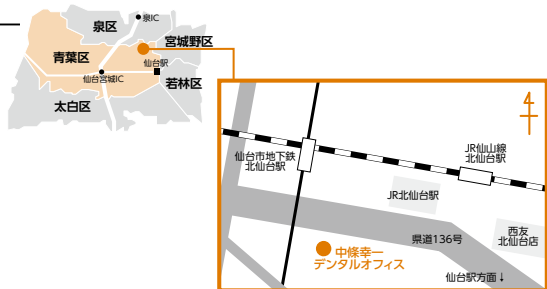
これは被災した県としては、例年と遜色ない対応ができたとい

う点で大変よこばしい結果といえます。今回、私は日本人の復元力の素晴らしさというものを実感しました。まずは各々の持ち場でできることをやろうという、誠実さと仕事に対するプライドがもたれませんか。歯科医師会の一員として、その時々に行えることに取り組めたことが私の誇りでもあります。

(院長 中條 幸一さん談)

## 支援連携先

●宮城県歯科医師会  
県内11地区の歯科医師会による歯科保健の啓発活動をする社団法人  
<http://www.miyashi.or.jp/>



## 中條幸一 デンタルオフィス

所在地 〒981-0913 仙台市青葉区昭和町5-36  
TEL 022-271-5322 FAX 022-271-5321  
E-mail gin-chujo@jcom.home.ne.jp  
事業内容 歯科開業医 創業年 1993(平成5)年  
代表者 中條 幸一(医療法人中條 理事長)  
従業員 4名

# 東北イラストレーターズクラブ

イラストの力で被災者を癒やしたい。  
支援活動を長く継続させることが大切。



だいきとほうく  
TICプロジェクト

イラストレーターができることは何だろう。  
“だいきとほうく TICプロジェクト”の発足。

自宅兼仕事場は仕事道具のモノが散乱して大変な状況でしたが、震災後数日で電気が復旧すると、メールで会員の安否が確認できるようになりました。メールのやりとりの中で、「イラストレーターとして何かできることはないか」という声が次々上がってきました。フリーでダウンロードできるロゴの制作や募金活動などのアイデアが出てそれなら1回皆で集まろうということになり、3月中にミーティングを開きました。さまざまなアイデアの中から、ハートをモチーフにしたイラストを全員が描き、それをさらに一つのハート型にまとめたハートロゴを作成することになりました。これが「だいきとほうくTICプロジェクト」の始まりとなり、ハートロゴがシンボルイラストとなったのです。

震災1カ月後の4月11日、東北イラストレーターズクラブによる被災地復興支援活動「だいきとほうくTICプロジェクト」が正式発足し、チャリティーグッズの作成もスタートしました。しかし会員の中には、沿岸部で被災し、ロゴづくりにも参加できなかったメンバーもいたのです。



▲チャリティー用グッズ販売などの様子

グッズ販売から街頭募金、似顔絵描きまで。  
3.11を決して風化させないという思い。

まずはTシャツやポストカード、マグカップ、トートバック、一人一人の描いたハートのイラストの缶バッジなど、さまざまなロゴ入りグッズのネット販売を開始しました。

次に4月29日には街頭で募金を呼びかけ、イラスト入りの募金箱を用意して、募金してくれた方には缶バッジを配ったのを皮切りに2011年は一番町や仙台駅前など、計3カ所で行いました。

毎年開催している東北イラストレーターズクラブ展では、市内のデザイナーやコピーライターとのコラボレーションによる復興支援ポスター22点を展示し、チャリティーグッズの販売と募金箱も設置しました。

また、未使用の画材を集める窓口となり、被災地の子どもたちに届ける活動をしているイラストレーターや石巻市のNPO法人「にじい

ろクレヨン」に送りました。子どもたちには絵を描くことで少しでもつらい気持ちを開放し元気になってほしい、そんな力が絵にはきつとある、と信じているからです。石巻復興イベント“みんなの祭り無礼講 in石巻”には直接出向いて画材を配布すると共に、その後2時間、4人のイラストレーターが交代で無料で似顔絵を描きました。この似顔絵が好評で、子ども連れの方からお年寄りまで多数お出でになりました。

現在はチャリティーグッズの販売、グループ展・個展での募金活動が主体となっていますが、今後については、イラストレーターとして絵で何ができるかということにこだわって考えています。3.11を忘れないためにも、メンバー全員が震災時にどうしていたかを絵で描いた記録集を作ることを検討するなど、記憶を風化させない活動を行っていきたくと思っています。(代表 佐藤 勝則さん談)



▲街頭募金の様子(2011年4月29日)



▲街頭募金の様子(2011年6月19日)



▲だいきとほうくポスター展 in 札幌の様子

## 東北イラストレーターズクラブ

事務局代表 〒984-0812 仙台市若林区五十人町119-1 アトリエ・ウイン内  
TEL・FAX 022-282-1218  
E-mail info@illustrons.com  
発足 1995(平成7)年  
代表者 佐藤 勝則  
会員 25名



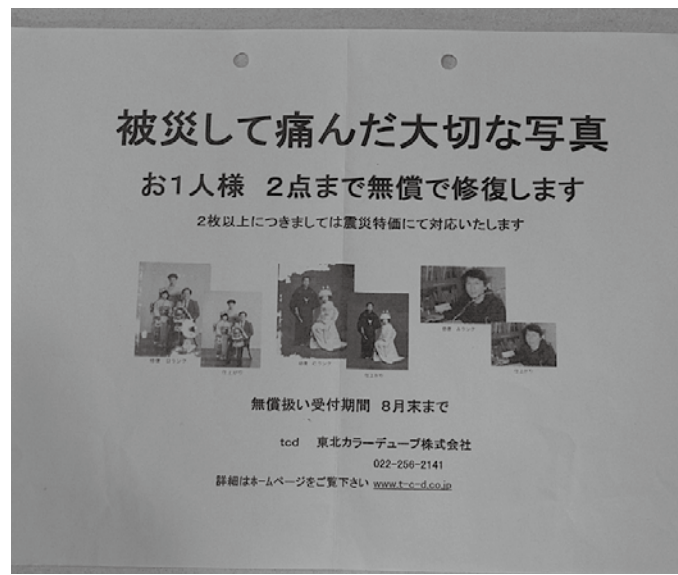
# 東北カラーデュープ(株)

“泥をかぶった写真だけがたった一つの思い出”  
それなら修復のお手伝いをやってみよう。

写真の仕事をしていながら、あらためて思った。  
プリント1枚1枚に込められたかけがえのないもの。

地震による直接的な被害はほとんどありませんでしたが、仕事も途絶え、もどかしい思いで会社に出勤する日々でした。しかし、連日テレビでは被災の状況が映し出され、悲しみに暮れている人がいると思うと、自分たちで何か意味あることができないかという話が出てきました。そんな中で社員の家族が津波被害を受け、アルバムが泥をかぶって汚れたまま残され、きれいにする余裕もないことや、陸前高田で仕事中に被災した知り合いから「ひどい状況だけど、そんな中でも写真って案外残ってるもんだよ」と聞かされ、具体的な支援のヒントが見えてきたのです。

持ち主不明の写真が並べられ、それを探す多数の方々のいる、七ヶ浜町を訪ねてみました。そこには、被災して汚れや傷みの激しいプリントの中から、必死に思い出の写真を探す人たちの姿がありました。そして大切な思い出を探す人たちのかけがえのない1枚のために、町の職員の方に「写真の修復なら任せてください!」と、被災プリントの無料修復を申し出たのです。同様にホームページ上でも点数を限定しての写真修復の受付を掲載し、私たちの支援活動が始まりました。



▲写真修復告知ポスター

思い出を復元する支援に、同業者の善意の輪が繋がった。  
企業として社会奉仕活動から得られたものは大きい。

地元マスコミにも“被災プリントの無償修復”の告知をしていたが、4月初旬から作業が開始されました。持ち込まれるプリントをスキャンし、修正ソフトでレタッチしてから再プリントして完成。写真の汚れや傷み具合により、作業時間や要する技術もまちまちで、時間のかかる物もありましたが、大事な思い出が残せるようにこだわって仕上げました。

この取り組みについて、東京のテレビ局が取材に駆け付け6月に放送されると、「こんな奉仕の仕方があるとは感激しました。ぜひ手伝わせてほしい」と首都圏のデザイナーなどから相次いで申し出がありました。そんな善意のサポートも得て、無料の支援は8月まで続けました。

修復できた写真の総数は、画像修復のためのデジタル処理を施した写真が500点ほど、スキャンして新しくプリントし直し

た写真が500点以上にのぼりました。多くの方から「こんなにきれいになるとは思わなかった」「家財は買えば元通りに揃うが、写真を撮った時の時間は二度と戻らないのでこんな嬉しいことはない」など、しみじみと心にしみる感謝の言葉をいただいたことが忘れられません。

奉仕とは“してあげる”ではなく、自分が積極的に“したい”と思っ、はじめて貢献できた満足感が得られるのではないのでしょうか。社員たち自身も、人の役に立てた自信や自負というものを掴み取ることができたと思います。会社は震災に遭って本当に大変だったのですが、社員全員のそういった気持ちがあって立ち直れたのだという手応えを今しっかりと感じています。

(代表取締役社長 竹上 信武さん談)



▲東北カラーデュープ外観



▲代表取締役社長の竹上信武さん

# 日振工発(株) 東北支店

直接支援から就労支援へ。  
自力での再生こそが真の復興。

こんな時だから自分たちが役に立つはず。  
1カ月間は会社で寝泊まり土日は物資運搬。

震災時は、散乱した事務所内の片付けを済ませ、午後4時30分には家族の安否確認のためにも社員全員に一旦帰宅してもらいました。後は安否確認などのメールを送るよう指示し、通常の業務に支障はありませんでした。

当社はインフラ周辺に関わる仕事なので、こういう時にこそ役に立たなければならぬと思い、すぐにフル稼働の態勢をとりました。私と事務員とで電話対応し、資材の確保や防犯のために泊まり込みを続け、1カ月間はほぼ24時間会社にいる状態でした。

社員には会社から食事などを提供していましたが、出勤してきた社員たちが食べ物や燃料に困ることはありませんでした。

3月14日のうちに、さまざまなルートを使って燃料や資材などの手配をして確保することができました。高速道路を使って富山や千葉、茨城などに直接買い付けに行ったケースもありました。ガソリンは運べないので、ディーゼル車を使って軽油を買い付けるなど、燃料調達にどう対応するかをパソコンでチェックシートを作りな

がら決め、すべてに対応していきました。米などの物資は農家に直接買い付けに行きました。



▲日振工発(株) 東北支店外観

避難所へ物資を提供し、暖房設備を点検。  
これからは働く場の提供こそが大切。

ガソリン不足が深刻になる中、会社に車が頻繁に出入りしていたため、近所の人から燃料を分けてもらえないかと持ちかけられ、無償で提供しました。困ったときはおたがいさまです。ボランティアの人にも無償で分けましたが、商用で使う方には原価で販売しました。震災直後はガソリンがなく本当に不便だったのです。もちろん、運んできた費用を考えると、売っても利益はありませんでしたけれど。

被災地には、灯油や米、カップラーメン、子供用歯ブラシ、衣類などの支援物資を持っていきました。また、避難所の暖房設備の点検や設置を請け負いました。タンクのメンテナンスなどは有料とさせていただきますでしたが、30分程で済む仕事に関しては無料としました。このような活動を、ほぼ毎週土曜・日曜に実施してきました。

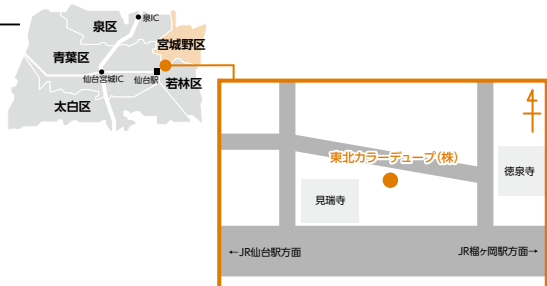
私は公益社団法人仙台青年会議所のOBです。当時は、青年会議所のメンバーとして、被災地のお祭りの支援などをはじめさまざまな活動を行いました。また2012年には、全国からのボランティア希

望者の受け入れ窓口担当として、仙台青年会議所でも対応し、ボランティアに来られた方をあちこちの活動場所に案内したり、要請側との橋渡し役をひたすら黙々と行ったりもしました。現在は企業としてできる支援として会社の雇用拡大などに取り組み、別事業の展開などで、年間20人以上の被災失業者を採用しています。震災によって、働く場を失った方も多く、収入の道が閉ざされれば、生活の再建もままなりません。地元の経済を回復させ、雇用の場を創出することこそが、事業主としてできる最大の支援だと思っています。

当社の事業規模がもっと大きければ、また私に資金力があれば、さらに支援ができたのでは、と思うこともあります。震災直後の支援に関しては、まだまだやれた、もっともっとやりたかったという思いでいます。(専務取締役兼東北支店支店長 中田 昌宏さん談)

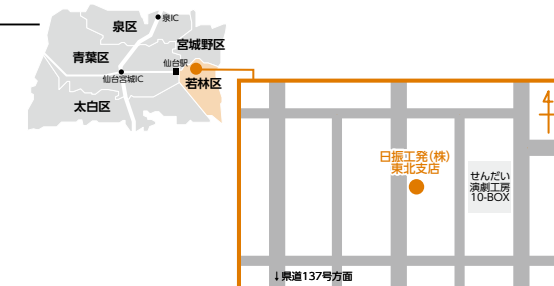
## 東北カラーデュープ(株)

所在地 〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡3-8-15  
TEL 022-256-2141 FAX 022-256-2142  
E-mail tcd@t-c-d.co.jp URL http://www.t-c-d.co.jp  
事業内容 フィルム現像、デジタル処理、プリント、デザインアルバム、各種加工、写真用品販売、  
ギャラリー企画・運営、業務用大型プリント、屋内外のサイン看板制作・施工  
創業年 1970(昭和45)年 代表者 竹上 信武 従業員 25名



## 日振工発(株) 東北支店

所在地 〒984-0015 仙台市若林区卸町2-12-6  
TEL 022-284-5890 FAX 022-284-5843  
E-mail info@nissin-kh.co.jp 創業年 1967(昭和42)年  
事業内容 地下タンク点検業 従業員 100名  
代表者 中田 幸宣



# (株)早坂サイクル商会

帰宅する交通手段がなくなったお客さまから寄せられた「助かった、ありがとう」の声は、社員の自覚と成長を促した。



▲早坂サイクルのみなさん

信号が止まり、クルマも止まり、自転車を引いて歩いてくる方たち。ご近所の方々やお客さまには、止まらなかった水道水を提供。

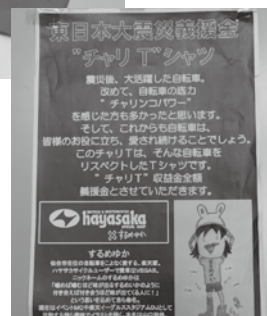
震災当日は従業員と店舗の対応に追われていたところ、駅前方面から多数の方々が自転車を引いて歩いてくるのに気づきました。街の中心部では窓ガラスの破片が散乱して、自転車が次々にパンクしている状況にあるということを知り、大変驚きました。すると今度は「電車もバスも止まっているので、自転車で帰宅したい」という方が増えてきました。停電のためレジも動かず、クレジットカードも使えず、そのうえ突然の緊急の事態でもあり、現金の持ち合わせのない方も多くいらっしゃいました。私たちはとにかく、目の前にいる困っている方たちの力になりたいと思い、住所と名前だけ伺い、自転車をお渡しすることにしました。「助かった、ありがとう。必ずまたお金を払いに来るから！」と感謝の言葉をかけてもらい、その後自転車を販売させていただいたみなさん全員に、再び来店していただきました。

上杉の店舗では震災直後から断水の被害がなく、普段通りに水道が使えました。ご近所の方々が水を汲みに来たり、来店したお客さまにペットボトルに入れてお分けしたりして、大変に喜んでいただ

たこともありました。地域に水道が復旧するまでの間、小さなことですができる範囲のことをやろうとしていました。



▲チャリティシャツ



▲チャリティシャツのポスター

## 中古自転車を山積みして被災地へ出発。

### チャリンコパワーで“チャリTシャツ”もつくり支援活動。

私は子どもが通う小学校などの親同士の集まり「親父の会」のみなさんと一緒に、石巻市の万石浦方面へ自転車を届ける支援に乗り出しました。店に眠っていた中古自転車を集めて整備点検し、何とか役に立ててもらいたいと思い、軽トラックに積めるだけ積んで出発。万石浦の現地は満潮になると道路が冠水し、クルマは危険で使えないという事情がありました。移動や荷物を運搬する手段として自転車が重宝され、またその数も足りなかったのです。子ども用やママチャリも含めて、しっかりと乗れるようにした自転車を十数台届けることができました。体育館や各避難所間の連絡の足などに、便利に使っていただいたようです。

2011年5月にはいろいろなご縁で、旧日本製紙クリネックススタジアム宮城球場でスタジアムDJをされた方と一緒に、Tシャツを作ってチャリティー販売も始めました。名付けて“チャリTシャツ”。自転車を愛する気持ちと被災地への思いを原動力に、ともに一生

懸命に支援活動に励みました。

12月には、チャリティーの収益と店舗での売上げの一部を日本赤十字社に寄付することができました。

社員たちは仕事でお客さまにありがとうと言われることはあっても、人助けや社会貢献で感謝されるのは初めてでした。この体験を経て、どちらかと言えば指示を受けて動くことが多かった社員は自分で考えて判断し、行動に移すことができるようになったのです。社員の身についた自信と成長は大きいものでした。震災の直前に父親から社長を受け継いだ私にとって、大変勇気づけられ、心強く前向きになることができた支援活動でした。

(代表取締役 早坂 武さん談)

## (株)早坂サイクル商会

所在地 〒980-0011 仙台市青葉区上杉4-4-1  
 TEL 022-222-8969  
 E-mail takeshi@hayasaka.co.jp URL http://hayasaka.co.jp  
 事業内容 自転車・オートバイの修理・販売、レンタルバイク事業  
 創業年 1942(昭和17)年 代表者 早坂 武  
 従業員 97名



# (有)ひらが

どんな小さな支援でも続けることが大切。人とのつながりから助け合いや感謝が生まれる。



▲ひらが外観

宮城県沖地震の経験が初動に生きた。いまその場でできることから始めた支援。

店舗のあるビルは非常に古い建物ですが、意外にも大きな被害はなく、2階美容室の壁の亀裂と1階床にひびが入ったぐらいでした。宮城県沖地震(1978年)の際も、瓶が棚から一つ落ちてきた程度でした。スタッフも宮城県沖地震を経験していたせいか、落ち着いて行動することができたようです。

電気と水道の復旧は3月12日でしたが、ガスは1カ月ほど待たされました。それでも仙台市中心部のライフラインの復旧は早かったので、震災直後から水の無料供給を実施しました。店頭に張り紙をし、ペットボトルを持ってきた方に水を入れて差し上げ、求める人がいなくなるまで続けることにしました。

当店は市街の中心部に位置する小さな店舗ですので、震災後はとくに道を聞かれることが多くなりました。しかし、被災して営業できなくなった商店や、なくなった施設もありましたので、尋ねられ

た場所に直接電話をしてみて確認をするというボランティアを行いました。小さなことですが、困って心細くなっている方の身になって、最後まできちんと対応して差し上げたかったのです。また、近隣のクリスマスロード商店街を含めて、各商店では震災で暗くなった街を明るくするために、出来るだけ明かりを絶やさぬように心がけました。店の電気をつけている時間を長くするなど、誰に言われたわけではなく、各商店が自主的に行ったものでした。



▲代表取締役の平賀ノブさん

## 東北人の我慢強さ、謙虚さに感動。被災した子どもたちへの支援も。

店頭ではたばこを販売しておりますが、震災時には42年間で初めて行列ができました。店では在庫がある限り、1人1個限定で販売させていただきました。背景には、日本フィルター工業多賀城工場の津波による流失や、日本製紙石巻工場の紙製造ラインの操業停止などの影響もありました。JTは全国に流通できるストックを抱えるまで、たばこの販売にストップをかけ、全国のたばこ屋からたばこが姿を消したのです。しかし外国製たばこはこの限りではなく、問題なく流通してしまっていたので、外国製たばこの売上が伸びることになりました。

ヘアサロンでは、震災で都市ガスの供給が止まったので、娘の知り合いのガス会社からプロパンガスの機器を導入することになりました。これによってサロンがオープンでき、シャンプー・ブローを500円で提供することができました。

水道水の無料供給や電話確認、そしてお湯で髪を洗えたことへの感謝の言葉や気持ちが、お客さまとの間で行き交い、相手を思いやりながら身の丈のことをやり続けることの大切さを、身に染みて感じ

ることになりました。

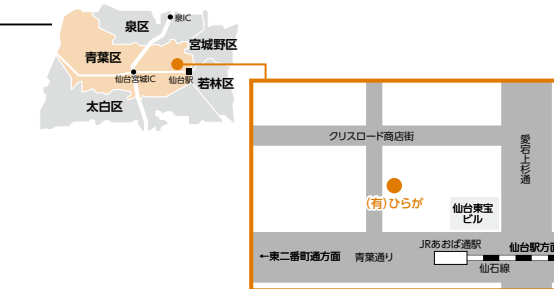
東北6県をはじめ全国たばこ販売協同組合とは普段から連絡を取り合っていましたので、全国から集まった義援金などを、東北のたばこ販売協同組合などに届けました。当時、釜石の避難所にいた岩手県たばこ販売協同組合理事長へは、義援金を直接手渡すことができました。車で向かった先々の、宮古・釜石・大船渡の各小中学校の避難所へ食料品・水・下着・日用品などを届けて回り、励ましの言葉をかけながら、お互いに気持ちを素直に伝え合えたことが今でも忘れられません。“東北六魂祭”などでも、子ども支援のチャリティーを続けていきたいと思えます。(代表取締役 平賀 ノブさん談)

### 支援連携先

●東北たばこ販売協同組合連合会  
 たばこ販売店が加盟する全国組織の東北連合会

## (有)ひらが

所在地 〒980-0021 仙台市青葉区中央二丁目1番15号  
 TEL 022-222-0158  
 E-mail info@hiraga.ne.jp  
 事業内容 化粧品・健康食品、プライダル、ヘアサロン  
 創業年 1971(昭和46)年  
 代表者 平賀 ノブ 従業員 4名



# マルシェ・ジャポン センダイ

## ボランティア活動に活かされた人とのつながり。 ふれあいが原点の“マルシェ・ジャポン センダイ”

### マルシェのテントが仮設の避難所に。 3日後には東北6県からの出店者があふれる。

生産者と消費者とを直接結びつける都市住民参加型の市場(マルシェ)がスタートして3年目の2011年3月11日、いつも通りにぎわうマルシェを激しい揺れが襲いました。実行委員長は直ちにマルシェの中止を決定し、出店者の多くは地元へ戻られました。

マルシェ会場に隣接した駐車場には、付近のビルから多くの人々が避難してきましたが、雪が降り始めたことから、急遽大型テントを3基並べて、仮設の避難所を作りました。停電のため、周辺は真っ暗でしたが、マルシェ会場には発電機があったため、明かりと暖房を確保することができ、ラジオによる情報提供も行いました。その日は帰宅が困難となった50人以上のかたが、一晩を過ごされました。また、携帯電話の充電には多くの人が行列を作りました。マルシェでは13日に救援対策本部を設置。翌14日には、マルシェの共同運営者である舞台ファームの倉庫内にあった野菜の大量ストックをマルシェで販売しようということになりました。17日の“マルシェ・ジャポン センダイ”開催日には10店舗だけの参加となりましたが、大変

な人出となりました。大型店が営業を再開できない中で、マルシェの出店者は小さな規模を強みに柔軟に対応でき、電気が通じなくても営業できたのです。

震災直後に、マルシェにスイートポテトなどの甘い物を扱う店が出店し行列ができました。実はこのスイートポテト、3月の幕張メッセでのイベントで販売するために大量に準備したものでした。しかしイベントは震災の影響で中止になり、製造者は大量の在庫に悩んでいたところ、マルシェならではの人と人とのつながりを通じて、出店に結びついたのです。甘い物が入手困難だった時期だけに、買い手と売り手の双方にとって大きな喜びとなりました。その後、マルシェでは出店費用無料の“被災地枠”も設け、被災された生産者を応援しました。



▲震災直後に開催されたマルシェ(3月17日)

### 全国のマルシェ・ジャポン支部からの支援。 新しい出会い、つながりが支援活動を広げた。

震災直後から、津波被害に遭われた方への炊き出しを始めました。この活動に呼応して全国のマルシェ・ジャポンのメンバーなどから、続々と支援物資が寄せられました。当初はどの場所で、どのような物資を必要としているか手探り状態でしたが、徐々に情報を整理することができるようになりました。

仙台のマルシェの会場では、全国のミュージシャンに声をかけてコンサートを行ったり、イベントを開催したりしました。同時に、全国のマルシェ会場では、募金活動や復興支援活動イベントなどが開かれ、そこで集まった募金なども届けられました。その募金は炊き出しに使わせてもらったり、沿岸部に桜を植樹している団体に届けたりしました。また、マルシェとしても植樹を行うことになりました。

新潟と大阪のマルシェは、支援物資を大型トラックに乗せて直接仙台まで運んで来てくれました。支部の中でも、新潟と大阪は過去に大きな震災を経験しているので、いつ、どんな物資が必要になるか、

段階的に心得ており、大変助かりました。万が一、どこかで何かが始まったら、今度は私たちがこの経験を活かして支援したいと強く思いました。

当初からマルシェに出店していただいていた福島の生産者は、「福島産は放射能問題があるのでマルシェでの販売を自粛したい」と伝えてきました。マルシェや他の出店者へ迷惑がかかるからとのことでしたが、その話を聞いてとても悲しくなったことが忘れられません。

マルシェは“昔の商店街”のように、生産者が消費者に直接売ることができるというのが原点です。震災後には、出店者も被災者となつたりもつことができ、それが広がりを見せました。しかし、運営自体を継続させていくことが難しくなり、予定通り2013年3月24日でマルシェ・ジャポン センダイは終了することになりました。

(仙台放送 番組審議室長 三宅 晃さん、  
デジタル事業部 三春 朱加さん談)

### マルシェ・ジャポン センダイ

所在地 〒980-0011 仙台市青葉区上杉5-8-33 (株)仙台放送内  
TEL 022-267-1266  
FAX 022-266-5212  
URL <http://www.marche-sendai.net>  
事業内容 都市住民参加型青空市場  
開催期間 2009(平成21)年12月~2013(平成25)年3月



# 我流久留米らーめん 麺屋 よか〇 (よかまる)宮町店

## 南三陸町でラーメン炊き出し500食。 仕入れ業者さんとスタッフの熱意に感動。

### 小さな店でも炊き出しで被災地を助けたい。 なんとか営業を続けながらの募金活動。

私たちの店は、震災2カ月前に新規オープンしたばかりのラーメン店でした。店舗の被害は意外にも少なく、電気は止まったままでしたが、プロパンガスと水は通常通り使えました。翌12日に「14時より営業いたします」の張り紙を出すと、温かいものを求めるお客さまでたちまち行列ができました。この非常事態でしたから、開業間もない店にとっては精一杯の“ラーメンおにぎりセット500円”を赤字覚悟で提供させていただきました。「店を開けてくれてありがとう」、「体が温まった」などの言葉をかけてもらい、涙がでるほど嬉しかったことを覚えています。

店は混雑でパニック寸前でしたが、妻の実家・志津川と母の実家・気仙沼のことは頭から離れませんでした。まだ誰とも連絡がついていなかったのです。とにかく募金活動をしてラーメンの炊き出しに行こうと、すぐに決断しました。お客さんは募金に大変協力的で、中には津波から逃れて3日ぶりの食事にありつき、涙ながらにラーメンを食べた方も募金してくださいました。

営業3日目(3月14日)ともなると食材も底をつき、精肉店・八百屋・



▲よかまるスタッフさん



▲店主の樋口雅雄さん

製麺などの業者さんとは連絡もつかず、仕入れもストップ状態。スタッフに疲労も見えてきました。残りの麺もあとわずかという、まさにその時、取引先のマツダ製麺さんが「よかまるさんが営業しているという噂を聞いたので、在庫を全部持ってきました！」と駆けつけてくれたのです。心配だったプロパンガスも「親方、ガスを満タンまで入れるから大丈夫」と村上ガスさんが来てくれました。そして3月19日にやっと実家との連絡がつき、スタッフの家族たちも含め、全員の無事を確認。よかまるを応援してくれる風が吹いてきたんだなと感じました。



▲志津川の旭ヶ丘での炊き出しの様子



▲暗くなるまで続けた炊き出しの様子

### 店で募金してくれたボランティア団体“TSUNAGARI”が橋渡し。 徹夜で仕込み、現地で暗くなるまでがんばれた。

3月12日から始めた募金はあっという間に目標額に達しましたが、初めてのことで炊き出しはとても大変でした。レンタカーやガス器具の手配、スープ用ポリタンクや発泡スチロール弁などの購入、各仕入れ業者さんへの協賛のお願いなど、無我夢中でやりました。特に、製麺業者さんには500玉をすべて協賛いただき、本当に感謝しています。

そして何より、500人前の仕込みが大変でした。前日から取りかかりましたが、結局、出発直前までかかり、徹夜でそのまま車を走らせることになったのです。

ようやく現地、南三陸町歌津の泊浜に到着しました。ところがそこには別のボランティアさんがいて「今日ここは、私たちがやるので他を探してください」とのことなのです。これだけ準備に時間を費やしてきたのにという思いもありましたが、ボランティアセ

ンターに連絡して別の場所を紹介してもらい、南三陸町志津川の旭ヶ丘で炊き出しを開始しました。ここは子どもたちが多く、元気な声が響く中で200食を作り、トンコツラーメンは好評でした。次に歌津町に移動して300食。暗くなるまで作り続けました。この炊き出しは、店の募金箱を見たボランティア団体“TSUNAGARI”の方が「協力しますよ!」と、私と被災地をつないでくれたことで実現できました。その偶然や、スタッフのがんばり、業者さんたちの心意気を支えに、被災地に熱いラーメンを届けることができたのです。

(店主 樋口 雅雄さん談)

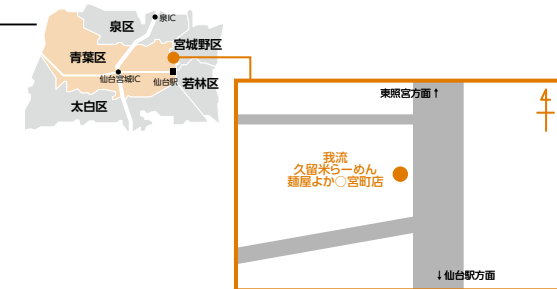
### 支援連携先

#### ●ボランティア団体“TSUNAGARI”

震災復興や地域交流活動をする学生ボランティア団体 <http://t-trip.6.qjlbz/~t-trip/tsunagari/jp/>

### 我流久留米らーめん 麺屋 よか〇 (よかまる)宮町店

所在地 〒980-0004 仙台市青葉区宮町3-7-42  
TEL 022-211-4901  
E-mail [yokamaru@friend.ocn.ne.jp](mailto:yokamaru@friend.ocn.ne.jp)  
事業内容 飲食業(ラーメンほか) 創業年 2011(平成23)年  
代表者 樋口 雅雄 従業員 3名



# (株)杜リゾート

家を失った被災者たちの住宅確保のために、  
不動産業界だからこそできることで支援したい。

アパート・ビルの入居者の安全確保と避難誘導。  
障がい者への支援物資の保管倉庫も提供。

本社建物を前年に取得してまもなくの震災でした。大きな借入金を残したまま建物は大きく破損し、賃貸入居者については全壊の扱いの世帯もありました。被災直後の、入居者から「ドアが開かない」、「戸締まりができない」などへの対応はもちろん、まず安全に避難所へ誘導することに全力を注ぎました。

私たちは同業者27社で「住み太e〜ねっ」というグループを組織しており、震災対応にいち早く立ち上がりました。着の身着のまま避難してきた沿岸部の被災者に対しては、「仲介手数料ゼロ」で住まい確保に協力しようと意志統一したのです。これを震災後3日目から実施しました。地域で事業を長く続けようとするからには、それくらいのことはやろうと、当時グループの会長を務めていた私が声をかけて取り組むことにしました。

被災者への当社独自の取り組みとしては、「障がい者用の支援物資保管のための倉庫」として、本社建物1階の物件を提供しています。この事業はNPO法人「地域生活オウエン団せんだい」さんを通して役立てていただき、衣類やおむつなど、必要最小限の物資を2011年3月から10月まで沿岸部に運ぶために利用されました。現在はこのスペー

スを被災者の後方支援のため、前仙台的のちの電話理事長・出村和子さん主宰の「出あい村サロン」として開放されています。



▲贈呈されたフォークリフト

不動産価格上昇の中、オーナーさんを説得し震災前の水準で被災者へ。  
ロータリークラブの活動で女川町の小さな浜を支援。

2011年5月になると仮設住宅が不足し、宮城県が応急仮設住宅として民間賃貸住宅を借り上げることになりました。その際、県の借上げ価格の上限が設定され、一部業者やオーナーさんが価格を上限ぎりぎりまで引き上げる傾向が見られました。これにより、震災前より家賃が上がり気味になりましたが、これは被災地や被災者にとって好ましくない状況でした。弊社の管理物件で値上げを希望するオーナーさんには、「地域のために、これからもこの土地で生きていくのだから」と説得して回り、なんとか震災前の家賃で提供することができました。地元の不動産業界の健全な姿勢を示すことができたのではないかと思います。

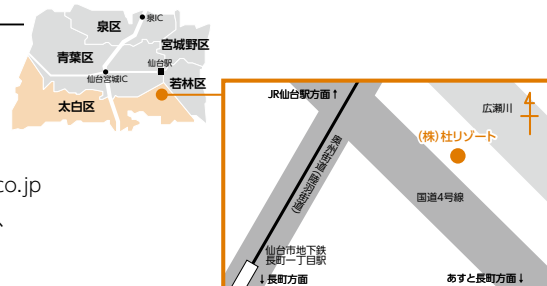
私たちは仙台南ロータリークラブの会員として活動する中で、大阪のロータリークラブから大きな支援をいただきました。被災

地の中でも、女川町の御前浜や指ヶ浜はいずれも30数世帯の小さな入り江の集落で、なかなか援助の手が届かない地域でした。今回は、沿岸部でも特に支援が必要と思われるこの地域に、魚網や養殖用筏、フォークリフト、船舶などを贈呈することができました。現地に出向いて網を手渡ししたとき、「これではんばねる」と漁師さんは涙を流して語ってくれました。

(代表取締役 山家 雪雄さん談)

## 支援連携先

- NPO法人「地域生活オウエン団せんだい」  
1人暮らしの住宅障がい者のサポートをする仙台のNPO団体  
<http://blog.canpan.info/tasuketto/>



## (株)杜リゾート

所在地 〒982-0011 仙台市太白区長町1-1-10  
TEL 022-246-0007 FAX 022-246-7251  
E-mail info@mori resort.co.jp URL http://www.mori resort.co.jp  
事業内容 仙台市や宮城県のアパート・マンション・戸建て、および事務所、店舗、駐車場、土地など、不動産建物の売買(仲介)、土地建物の賃貸(仲介)  
創業年 1991(平成3)年 代表者 山家 雪雄 従業員 4名

# レストラン 開拓家

避難者にあたたかい食事を作って差し上げたい。  
個人でも“できる時にできることで”力になれる。



▲オーナーシェフの飯野誠さん

レストランを早く再開しなければという焦りと、  
避難所でもっと食事を作って上げたいという気持ち。

被災してライフラインが停止し、冷蔵庫の中にある物が使えなくなるので、避難所である蒲町中学校に避難する際、卵やカレー粉、パン粉、そしてご飯も一緒に持って行きました。避難所は民生委員の方や蒲町の住民の方たちが中心となって運営されており、私も炊き出しの調理のお手伝いとして参加しました。調理を生業としている者がここで役に立てなくてどうする、という気概でした。避難者の精肉問屋の方から、卸町周辺の自社の倉庫にある鶏肉・豚肉・牛肉を提供していただき、みんなでカレーなどを作ることができました。ほかにも直径1.5mほどの大きな鍋で味噌汁やスープ、おかゆなどを作り、鍋や丼などを持って来られたご近所の方々にも分けて差し上げました。同じ地域に住む者同士が、震災という緊急時にそれぞれの得意分野を生かして協力し合えたことで、何とか震災直後の危機的状況乗り越えたのだと思います。やがて肉屋さんも再開し、震災直後から開いていた仙台中央卸売市場にも青物の流通が回復し、避難所に身を寄せていた住民も自宅に戻れるようになりました。しかし、都市ガスの復旧はまだでしたので、店の営業再開はできませんでした。

そうした中で、知り合いから電気ホットプレートが届けられ、店

を再び開けられるようになりました。お腹を空かせた学生さんが外で開店を待っていてくれて、うれしかったですね。とにかく提供できる食材でメニューを考えようと、今まで出したことのないサンマのみりん干しも、ストックがなくなるまで出しました。やがて都市ガスの供給が始まり、カツオやヒラメなど気仙沼や石巻の魚介を使った、ハンバーグとのセットメニューも復活することができました。被害の大きかった沿岸部から魚介類が届くようになったときは嬉しかったですね。店の味を待っているお客さまの存在が何よりありがたかったです。



▲レストラン開拓家外観

いま目の前で困っている被災者の役に立ちたい。  
自分の助けが必要と思ったときに支援を。

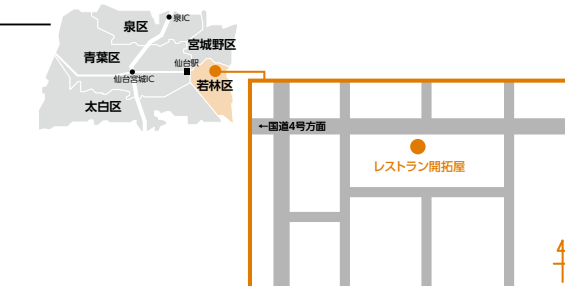
震災直後から翌日にかけて、荒浜地区から着の身着のまま避難されて来た方たちが、200~300人ほど七郷中学校に身を寄せていて、その方たちが今いちばん欲しいものは靴下だという話が耳に入りました。私たちが蒲町中学校に避難中ではありましたが、津波の被害を受けたわけではありません。我が家にも子どもがおりますので、こんな寒中濡れた足のままではどんなに辛いだろうということで、家内が子どもの靴下などをすぐに届けに行きました。家にある物で何が役に立つかと聞いて、すぐに持って行くことができてよかったなと思います。

その後、家内が知り合いを通じて、今度は荒浜の子が中学校の入学式に着ていく制服がないという話を聞き、蒲町中学校に通ってい

た時に娘が使った学生服と体操着を持って行き差し上げました。被災の状況が詳しく分かってくるほどに、いたたまれない気持ちになり、1人でも行動しようという思いになりました。

私たちの行ったことは、個人としての本当に小さなことでしたが、荒浜の方たちのことを考えれば、何か役に立てることがあれば、何でもして差し上げたいという心境でした。同じ若林区の住人として、すぐ近くまで津波が押し寄せたことは他人事ではありません。この地でレストランを続けることができ、地域の中で店も家族も成長させてもらったことを思うと、身近な地域に困っている方がいれば、これからは何かしら力になって差し上げたいと考えています。

(オーナーシェフ 飯野 誠さん談)



## レストラン 開拓家

所在地 〒984-0032 仙台市若林区荒井字押口1-30  
TEL 022-390-7830  
事業内容 レストラン 創業年 1985(昭和60)年  
代表者 飯野 誠 従業員 2名